湾岸戦争の中の葬送

十年ぶりのアフガニスタン

湾岸戦争が勃発して間もなくの一九九一年二月下旬、私はＪＡＭＳ（日本ーアフガン医療サービス）のアフガン人スタッフの葬儀に加わるため、北西辺境州の自治区からアフガニスタンのクナールの奥地に入っていた。もう一つの目的は、年来の目標であったアフガニスタン内部クリニック開設の状況調査であった。我々は親族数十名と遺体を数台のジープに分乗させ、クリニック開設予定地の下流、北部ヒンドゥクッシュ山脈南麓の一渓谷であるダラエ・ヌールまで輸送した。早朝ペシャワールを出発し、道々のキャンプで親族を集めて北部のナワ峠から国境を越えた。

葬儀は血縁社会における重要な要素である。国境の警備は厳重になっていたが、「葬儀」に対してはパキスタン側も寛容で、当然のごとく通過させる。カイバル峠がなお閉鎖されている状態で、ペシャワールーカブール間の交通はこのナワ峠を経由するようになっており、毎日ミニバスが三日がかりで運行していたものの、親族の中には難民となって初めて帰郷する者も多く含まれていた。

二月のナワ峠は標高二五〇〇メートルの恐るべき悪路で、降雪をかきわけ、ゆるゆると車が進む。頂上からがアフガニスタン領内になり、検問所を境に左側通行から右側通行となるので、不注意な運転手はしばしば事故をおこして転落する。崖の中途の木にぶら下がっているトラックの残骸を見かける。峠の頂からの眺めは圧巻で、クナール渓谷の一部と遥かに純白に眩いヒンドゥクッシュの大山脈は突然眼前に広がる。

アフガニスタン！ 十年ぶりにこの光景を眺めた者の心境はどうだったであろう。荷台に満載した十数名の者にはにわかに活気づいた。ＪＡＭＳのスタッフたちも別人のように生き生きしていた。みな多弁となり、お国なまりのパシュトゥ語とペルシャ語が快活に飛び交う。喋る毎に吐き出す息が、寒気で白煙のように勢いよく立ちのぼる。遥かな万年雪はおそらく何世代も彼らの脳裏にやきついた思い出の舞台であったのだろう。案内で連れて来られたパキスタン側の住民が逆に小さくなっている。

私もまた、この光景に一つの郷愁のようなものがある。初めてヒンドゥクッシュを眺望した一九七八年、あれから十余年の歳月が昨日のようであり、私を導いた出会いの連続が夢のように一瞬に感ぜられる。ペシャワールの仕事に関わってきた友人や先輩たちの中には既に故人となった者の少なくなかった。あのとき自分が今ここにいることを誰が予想しただろうか。

そして五年前の一九八六年にＪＡＭＳの前身のアフガン・レプロシー・サービスが発足した時、らいの震源地たるヒンドゥクッシュ北部山岳地帯に活動を展開することを立案し、今それがやっと端緒についたことに対する一つの感慨があった。アフガン人チームを組織し、幾多の闘争と妥協を重ねて味方にも敵にも恵まれた。しかし、敵でさえ今は懐かしい。彼らの多くもペシャワールを去っていた。多くの者が来ては去って行った。愚純な私は器用に「総括」しては引き上げてゆく者の聡明さがうらやましいと思った。我々を引きずっていたものは、野心や事業欲でもなく、さりとて高邁な信念や理想というにはおこがましい。ただの愚直さかも知れなかった。それでも良い。現に、既に自分を支える心象風景となった、この眼前のヒンドゥクッシュの大山脈を満喫できる幸せがある。断ち切られたふるさとに帰る者の笑顔を見れる幸せがある。自分は恵まれた人間であると思った。

峠を越えた我々はクナール渓谷に入り、ジャララバード方面に下って目標のダラエ・ヌール渓谷の入り口に達した。クナール渓谷の盆地は一年以上にわたって反政府ゲリラ組織の支配下にあった。ちょうど四年前に我々がパキスタン領内のバジョウル難民キャンプで越境爆撃に遭遇したソ連＝アフガン政府軍の拠点だった所である。

息を呑む光景であった。「難民帰還」どころではない。田畑は荒れ果てて砂漠のようであり、破壊された村落の残骸は、まるで廃墟と化した遺跡である。ただ遺跡と異なるのは、時折人間の死体がころがっていることであった。莫大な費用をつぎ込んだ難民帰還プロジェクトは、少なくともここでは複雑な対立と民心の荒廃以外に何物ももたらしていなかった。地元住民、抵抗組織、アフガニスタン政府軍の三つ巴の抗争に加え、湾岸戦争の影響はアフガン人内部に複雑な対立を更に増幅させていた。

現地ではアラブ系の団体が財政にものを言わせて影響力をもち、一方米国の軍事援助で肥大したイスラム過激党がミニ軍政を敷いてソ連＝政府軍と前線を構えていた。住民は砲火と干渉の中で辛うじて自治を守ろうとしていた。彼ら住民自身も武装していたが、十二年にわたる内戦に疲れ切っており、大多数は難民としてパキスタン側に避難していた。